

夏目漱石の翻訳語法

はじめに

夏目漱石は「言文一致体」で小説作品をどのように手掛けていたのか。漢文学を学び、英文学を学びロンドン留学経験のあった漱石は、作品の文体にいか「翻訳語法」というものを取り入れたのか。今回は初期作品『吾輩は猫である』（一九〇五年）と『坊っちゃん』（一九〇六年）の二作品を調査していく。『三四郎』、そして後期作品『こゝろ』の翻訳語法の用法をも見ていく。

山本正秀^{注1}によると、言文一致運動は一八六六（慶応二）年から一九二二（大正十一）年頃までの期間であり、漱石の殆どの作品はこの時期と重なる。山本氏は言文一致運動が発生した際の大きな目的とは、「自国の生きた現代の言語によって新しい近代的な思想や感情を的確自在に表現できる近代日本語体を完成すること」であり、西洋先進国の言文一致の事実^{注2}に誘発された洋学者たちに

よるものであったという。

本稿で取り上げる明治期の翻訳語法を論じた研究には森岡健二^{注2}次氏のものがある。江戸時代と明治時代、特に文章改革が盛んだった明治時代における翻訳語法について、日本人が外国語をどのような方法で読んできたかを、蘭学時代と英学時代とに分けて、欧文訓読の発達と展開を辿っている。英文時代では、欧文脈についての資料調査の抽出結果と考察があり、日本人が英文を直訳したものと、日本諸作家たちの翻訳の文章を抽出している。森岡氏は明治の翻訳語法を次のように論じており、それを一部抄出する。

①直訳。②日本人の文章における用例。③翻訳における用例。欧米語の動詞や動詞句には、日本語と異なる使い方があり、それをそのまま翻訳すると、いかにも欧文脈と云った印象を伴うという。

seem, look

山崎 琳子

① It **looked** just as if the coat had been cut with a knife, and had afterward grown together again.

(其は恰も小刀を以て切られて後再び共に生長したりしかの如く見えし)

②「…見エル」には、目に映ずる(山が見える)の用法と別に

「…と(ように)思われる」の用法がある。直訳で *seem* を「…見エル」と訳し、口語文にも同じ用法が多数現れる。

・恰も闇を裂く稲妻の眉に落とると見えて消えたる心地がする。」

(明三七 夏目漱石「倫敦塔」)

・「この迷信からの解放は今成就されんとしつゝあるやうに見える。」

(大一一 有島武朗「宣言一つ」)

③「彼は何事をなす時間をも有する如く見ゆ。」

(he **seems to** have time for everything.)

・「かうも時間が経つてから見るとすぐその翌日であるかのやうに思はれる。」

(It seems to me, at this distant of time, as if it were the next

day….) (大七 矢口達訳「デギッドの生立」)

must

直訳では、*must* は「…セザルベカラズ」と文語形で訳すことが

あるが、多くはその口語の「…ネバナラヌ」を用い、当然の義務を表す。当然の推定には「…に相違ない」「…違いない」というのが適当であるが、直訳では「…ネバナラヌ」と固定した訳を与えるため、次の三番目の直訳のように、完了形に *must* が付くときには

は、「往タネバナラヌ」という非文法的な無理な言い方をすることもある。日本人の書く文章では、普通、義務(…ねばならない)と推定(…に相違ない)とを区別するが、長塚節が区別しないで

「…ねばならぬ」で通しているのは直訳の影響かと思われる。

① I **must** know exactly…

(余は正確に知らねばならぬ。意識||余は此等の詞は精確に知らざるべからず。)

②「唯一心に便のない一人の母親の心を安めねばならぬ。」

(明二〇 二葉亭四迷「浮雲」)

・「木部と葉子は恋といふ言葉で見られねばならない間柄になつてゐた。」

(明四四 有島武朗「或る女」)

【長塚節の用法】以上の「…ねばならぬ」は義務を表すが、長塚節の「土」では、これに加えて「…に相違ない」「…であるう」という当然の推定にもこれを用いる。

・「こついふ無惨な扱ひはどうしても他人の手に任せられねばならなかつた。」

らなかつた。」

③・余はこれを試みなければならぬ。」

(六一二 柳田泉訳「英雄及び英雄崇拜」)

[I must make the attempt.]

「推量」の訳

・「何者かがそれを作つたに違ひない。」

(大四 大町桂月「ボンペイ最後の日」)

森岡の研究を承けて、田島優氏は漱石の前期三部作(『三四郎』『それから』『門』)から動詞・動詞句や助動詞の翻訳語法を抽出し、当時の言文一致運動において漱石作品の翻訳語法が重要な役割を担っていたと考察している。^{注3}

田島氏は次に設定した項目で翻訳語法の例を抽出している。

- ① have…………… (～を持っている)
- ② find…………… (～を見出す)
- ③ give…………… (～を与える)
- ④ feel…………… (～を感じる)
- ⑤ seem・look… (～と見える)
- ⑥ belong to…… (～に属する)
- ⑦ be obliged to… (余儀なくされる)
- ⑧ be used to…… (～が常である)
- ⑨ must…………… (～ねばならない・～なければならぬ)

⑩ may…………… (～かもしれない)

⑪ would・should・might…… (～たであろう・～たのだろう)

⑫ after…………… (後)

⑬ before…………… (前)

⑭ as soon as…… (～や否や)

⑮ as~as possible・as~as can… (出来るだけ)

⑯ as~as・so~as…… (だけそれだけ)

⑰ as the same time… (～と同時に)

⑱ because・for…… (なぜなれば、如何となれば)

⑲ not only~but (also)…… (～のみならず)

⑳ too~to~…… (～にはあまりに)

㉑ the more~the more… (～すればする程)

㉒ rather than…… (～よりはむしろ)

㉓ without…… (～ことなしに)

㉔ in spite of…… (～にもかかわらず)

㉕ instead of…… (～ないかわりに)

㉖ if…………… (もし～ならば)

㉗ in order to…… (～するために)

㉘ though…… (～といえども)

一、『吾輩は猫である』の翻訳語法

本稿では、漱石の各作品の翻訳語法を全例抽出してみる。会話を除き、地の文のみを対象とした。

一、翻訳語法一覧

【依拠文献】『夏目漱石集Ⅰ』（日本近代文学大系第24巻、角川書店、一九七二）

- ① have (〜を持ってゐる) 1例
- ② find (〜を見出す) 4例
- ③ give (〜を与える) 14例
- ④ feel (〜を感じる) 13例
- ⑤ seem・look (〜と見える) 126例
- ⑥ belong to (〜に属する) 6例
- ⑦ be obliged to (余儀なくされる) 2例
- ⑧ be used to (〜が常である) 1例
- ⑨ must (〜ねばならない・しなければならぬ) 69例
- ⑩ may (〜かもしれない) 76例
- ⑪ would・should・might (〜たであろう・〜たのだろう) 3例
- ⑫ after (後) 15例

- ⑬ before (前) 6例
- ⑭ as soon as (〜や否や) 13例
- ⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 4例
- ⑯ as-as・so-as (だけそれだけ) 3例
- ⑰ as the same time (〜と同時に) 16例
- ⑱ because・for (なぜなれば、如何となれば) 0例
- ⑲ not only-but (also) (〜のみならず) 30例
- ⑳ too-to (〜にはあまりに) 9例
- ㉑ the more-the more (〜すればする程) 4例
- ㉒ rather than (〜よりはむしろ) 9例
- ㉓ without (〜ことなしに) 0例
- ㉔ in spite of (〜にもかかわらず) 17例
- ㉕ instead of (〜ないかわりに) 13例
- ㉖ if (もし〜ならば) 45例
- ㉗ in order to (〜するために) 35例
- ㉘ though (〜といえども) 4例

計549例

『吾輩は猫である』の28種類の翻訳語法の例数と、ページ数(44ページ)に対する例数の割合、全例(四作品140例)に対する例数の割合を表に記す。

『吾輩は猫である』割合一覧			
翻訳語法	例数	ページ数443%	全例数1402%
①have	1	0.23	0.07
②find	4	0.9	0.29
③give	14	3.16	1
④feel	13	2.93	0.93
⑤seem・look	126	28.44	8.99
⑥belong to	6	1.35	0.43
⑦be obliged to	2	0.45	0.14
⑧be used to	1	0.23	0.07
⑨must	69	15.58	4.92
⑩may	76	17.16	5.42
⑪would・should・might	3	0.68	0.21
⑫after	15	3.39	1.07
⑬before	6	1.35	0.43
⑭as soon as	13	2.93	0.93
⑮as as possible・as as can	5	1.13	0.36
⑯as as so as	3	0.68	0.21
⑰as the same time	16	3.61	1.14
⑱because・for	0	0	0
⑲not only but (also)	30	6.77	2.14
⑳too to	9	2.03	0.64
㉑the more the more	4	0.9	0.29
㉒rather than	9	2.03	0.64
㉓without	0	0	0
㉔in spite of	17	0.04	1.21
㉕instead of	13	2.93	0.93
㉖if	45	10.16	3.2
㉗in order to	35	7.9	2.49
㉘though	14	3.16	1

二、翻訳語法の用例

- ① have (〜を持っている) 1例
 ・「白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持って居る」
 (p 50)
- ② find (〜を見出す) 4例
 ・「自己を描いて他に研究すべき事項は誰にも見出し得ぬ譯だ。」
 (p 332)
- ③ give (〜を与える) 14例
 ・「人に告げられんでも人に知られて居るなど云ふ自覺を彼等に與ふる丈が愉快である。」
 (p 142)

④ feel (〜を感じる) 13例

・「彼は是に至つてあたかも去年の臭気を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍まで廻わした。」
 (p 56)

⑤ seem・look (〜と見える) 126例

・「教師の家に居ると猫も教師の様な性質になると見える。」
 (p 57)

⑥ belong to (〜に属する) 6例

・「第一黒い襟飾りが襟に属して居るのか、シャツに属して居るのか判断しない。」
 (p 343)

⑦ be obliged to (余儀なくされる) 2例

・「かう云ふ實の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。」
 (p 57)

⑧ be used to (〜が常である) 1例

・「彼等は毎朝主人の食ふ麵麩の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。」
 (p 66)

⑨ must (〜ねばならない・くなければならぬ) 6例

・「油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。」
 (p 485)

⑩ may (くかもしれない) 76例

・「或は溝へ湯を抜く漆喰の穴より風呂場を迂回して勝手へ不意に飛び出すかも知れない。」 (p 215)

⑪ would・should・might (くたであらう・くたのだらう) 3例

・「主人は祭日とも知らずに學校へ缺勤届けを出したのだらう。」 (p 378)

⑫ after (後) 15例

・「ある小春の穩かな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯ちゆうはん後快よく一睡した後、運動かたぐこの茶園へと歩を運ばした。」 (p 150)

⑬ before (前) 6例

・「吾輩の忍んで来る前に評判記は濟んだものか、又は既に落第と事が極つて念頭にないものか、其邊は懸念もあるが仕方がない。」 (p 145)

⑭ as soon as (くや否や) 13例

・「見送りに出た兩人が席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云ふ主人も「ありあ何だい」と双方から同じ問をかける。」 (p 145)

⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 5例

・「先づ一應の挨拶をして出来る限り早く御免蒙るに若しくはないと決心した。」 (p 79)

⑯ as-as・so-as (だけそれだけ) 3例

・「然し忍ばねばならぬ丈其丈猫に對する憎惡の念は増す譯であるから、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。」 (p 169)

⑰ as the same time (くと同時に) 16例

・「幸にしてニユートンは第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。」 (p 305)

⑱ because・for (なぜなれば、如何となれば) 未見

⑲ not only-but (also) (くのみならず) 30例

・「吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、腦力の發達に於ては敢へて中學の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造丈はどこ迄も猫なので人間の言語が饒舌れなぞ。」 (p 142)

⑳ too-to (くにはあまりに) 9例

・「鼻子の先刻からの言葉遣ひが初對面の女としては餘りに存在過ぞんざいぎるので既に不平なのである。」 (p 129)

㉑ the more-the more (くすればする程) 4例

・「吾輩は世間が狭いから甚盤と云ふものは近來になつて初めて拜見したのだが、考へれば考へる程妙に出来て居る。」

②② rather than (〜よりはむしろ) 9例 (p417)

・「吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。」 (p50)

②③ without (〜ことなしに) 未見

②④ in spite of (〜にもかかわらず) 17例

・「所を生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかの如く構へるのだから、當人の苦しいにかゝはらず傍から見ると大分可笑しいのである。」 (p398)

②⑤ instead of (〜ないかわりに) 13例

・「近來は大分減つて鳥が見えないと先刻思つたが、吾輩自身鳥の代りにこんな所で行水を使はう杯とは思ひも寄らなかつた。」 (p487)

②⑥ if (もし〜ならば) 45例

・「もし此機をはづすと來年迄は餅といふものゝ味を知らずに暮して仕舞はねばならぬ。」 (p7)

②⑦ in order to (〜するために) 35例

・「元來口は音を出す爲め鼻は空氣を吐吞する爲の道具である。」 (p189)

②⑧ though (〜といえども)

・「猫と雖も相當の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛り積りで居る。」 (p253)

まとめ

以上、⑤ (〜と見える) ⑨ (〜ねばならない、〜なければならぬ) ⑩ (〜かもしれない) の三種類の使用数が非常に多かつた。⑤⑩については、ある一匹の猫の視点から、周囲の登場人物について推測しながら語られているため、多く使用されたのだと思われる。使用数が多かつたものを中心に翻訳語法について見て行く。

・④ (〜を感じる) は、全体の約3%の用例数であつた。決して用例数は多くなかつたが、森岡氏が述べるように、「cat」の影響であるうか、口語文になつてから特に多く用いられるとともに、抽象的な事柄に対しても、用いられるようになったという用例が採録された。

「眞理は既に二つ迄發明したが、餅がくつ付いて居るので毫も愉快を感じない。」 (p74)

(右の用例は、「愉快」という抽象名詞が使われている。)

・⑤ (〜と見える) は、一番多く採録された。「目に映する」用法と「〜と思われる」用法があり、その意を含めて「〜と見える」という訳で扱われている。今回は、用例のほとんどが「〜と思

われる」用法であった。また、予測や推量の意で用いているため、抽象的な叙述であることが多い。

「然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。」(p50)

・⑨ (くねばならない・くなければならぬ) は、当然の義務(くネバナラヌ)と当然の推定(く二相違ナイ・く違イナイ)という意が含まれるが、当作品においてはほとんどが当然の義務の意で採録された。長塚節はこの二つの意を区別せず(くねばならぬ)の直訳で通しているという。彼の代表作『土』は明治四三年の作品である。一方で『吾輩は猫である』は明治三九年の作品であるため、漱石にはまだ義務と推定の語を区別をつけて使用していたのではないだろうか。ここで、(く二相違ナイ・く違イナイ)を用いた文が48例も採録されたため、一部取り挙げる。

「小供の唱歌もやんだ様だ、きつと台所へ馳け出して来るに相違ない。」(p74)

右の例のように、⑨ (くねばならない・くなければならぬ) 69例に対し、(く二相違ナイ) 48例であり用例数の差は少ない。この結果から、当然の義務(くネバナラナイ)と当然の推定(く二相違ナイ)を区別して用いていたことが分かる。

・⑩ (くかもしれない) は当作品では二番目に多く76例も採録された。

「縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れのである。」(p47)

右の例は、仮定法「If, S+would/could・・・」(もしくならば・たであらう)の形式である。英訳にするとおそらく「餓死したかも知れん」は「might starve to death」で、mightが使用されており⑩ would・should・might (くたであらう)である可能性がある。しかし、ここでは日本語で「かも知れん」と書かれていた。また、森岡氏は「mayの過去 mightも完了形を伴って仮定を示すとき、くタデアラウと訳す」としていたことから、⑩に分類した。ちなみに、以下の用例は⑩に当てはまる仮定法の用例である。

「もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つてゐたならば、私は屹度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。」(『こゝろ』p257)

(「謝罪したらう」=「would/could apologize」と考えられる)
・⑭ (くと同時に) は30例採録された。森岡氏の考察では「同時に動かす」という用法とは別に、「二つの出来事が同時に起こること」の用法が明治以後に多くなつたと記されている。

当作品は、二つの出来事が同時に起こる用法がほとんどであった。

「偕此人間に就て、人間自身が數千年來の觀察を積んで、大に玄妙不思議がると同時に、益々神の全智全能を承認する様に傾いた事實がある。」(p193)

また、対象物である主語に対し、二つの要素を説明している用例も採録された。

「鏡は己惚の醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である。」(p332)

・①⑨(くのみならず)は30例と、四作品の中でも一番多く採録された。ほとんどの用例は□内の二つの叙述の間に置かれ、一つの文でつなげている。

「吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、腦力の發達に於ては敢へて中學の三年生に劣ざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造丈はどこ迄も猫なので人間の言語が饒舌れない。」(p142)

漢文訓読体を用い、「加之(読み：のみならず)」と表記している。この用例は30例中二例であり、文頭にのみこの用法で書かれていた。

「加之ののみならずかう知名の學者が名前を列ねて居る中に姓名だけでも入籍させるのは、今迄こんな事に出合つた事のない主人に取つては無

上の光榮であるから返事の勢のあるにも無理はない。」(p87)

一方で、本来は(シカノミナラズ)と読む漢文訓読体「加之」を、平仮名で表記している。前述の内容を副詞「しか」に置き換えた形として、分かりやすく表記しようとしたのだろうか。ここでは二つの用例が採録された。

「しかのみならず吾輩は寒月君に對して甚だ同情の至りに堪へん。」(p141)

「しかのみならず、五本の毛へこびりつくが早いか、十本に蔓延する。」(p264)

別に(名詞十のみならず)用法が1例採録された。ここでは①報を(のみならず)によって②珍報で具体的な名詞に置き換える役割を担っている。

「音たに①珍報のみならず、嬉しい快よい②珍報である。」(p182)

②(くといえども)は、当作品でのみ採録された語法である。森岡氏によると「漢文訓読系の語法で、明治の普通文には盛んに用いられていたが、口語文が発達するとともに衰え、極めて稀になる」と記されている。ここでは14例採録された。「いえども」は漢文の「雖」の訓読によって用いられ、

①逆接の確定条件（～ではあるが）

「敵と雖彈道のあまり遠過ぎるのを自覺せん事はないのだけれど、そこが軍略である。」（p297）

②逆接の仮定条件（たとえ～であつても・かりに～であつても）
「たとひ天下の美猫と雖御免蒙る。」（p264）の用法がある。

右の用例のように、当作品も①②の用法で書かれていた。特に②仮定条件がほとんどであつた。このように、（～といえども）は、仮定的要素で用いているようだ。

また、*though* は現代の英和辞典^{注4}によると、接続詞（～ケレドモ）と訳し、「前に述べた事柄と相反する内容を導く」意で使用する。用法は少し異なるが、同じ *though* の訳として（～ケレドモ）の抽出も行った。その結果、（～ケレドモ）は全34例採録された。その内の26例は会話文であつたため、地の文で用いられたのは8例である。

「主人がすまし這入るくらいのところだから、よもや吾輩を断わる事もなからうけれども万一お氣の毒様を食うような事があつては外聞がわるい。」（p265）

このように、（～といえども）は口語より文語的であり、漢文訓読用法の要素が強い。一方で（～けれども）は会話文で頻出したように、口語文として使われやすいことが分かった。翻訳語法と

しては、*though* の直訳として（～いえども）を挙げるのは難しいと考えられる。

『吾輩は猫である』は明治三八年に発表されたものである。言文一致運動の確立期（明治三三年～四二年）に当てはまっている。この用例数と直訳を多く取り入れていることから、漱石にとって当作品は処女作でありながら、翻訳語法をすでに常用していた。

また、⑨（～のみならず）のように様々な形で語法を用いていたことも分かった。一方で、⑨（～ねばならない・くなければならぬ）のように当然の義務・当然の推定の複数の用法を区別していた⑩（～といえども）の漢文訓読の要素が強く、同じ *though* の訳（～けれども）の用例も複数採録されたことから、28種類すべてを翻訳語法として使用していたわけではないようである。この頃の漱石は教師時代であつた。お堅い口調つまりは文語的特徴が表れた。

二、『坊っちゃん』の翻訳語法

一、翻訳語法一覧

【依拠文献】『夏目漱石集Ⅱ』（日本近代文学大系第25巻、角川書店 一九六九）

① *have*（～を持っている）…………… 4例

- ② find (〜を見出す) 0 例
- ③ give (〜を与える) 1 例
- ④ feel. (〜を感じる) 0 例
- ⑤ seem・look (〜と見える) 22 例
- ⑥ belong to (〜に属する) 0 例
- ⑦ be obliged to (余儀なくされる) 0 例
- ⑧ be used to (〜が常である) 1 例
- ⑨ must (〜ねばならない・〜なければならぬ) 12 例
- ⑩ may (〜かもしれない) 22 例
- ⑪ would・should・might (〜たであらう・〜たのだろう) 8 例
- ⑫ after (後) 5 例
- ⑬ before (前) 2 例
- ⑭ as soon as (〜や否や) 6 例
- ⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 0 例
- ⑯ as-as・so-as (だけそれだけ) 0 例
- ⑰ as the same time (〜と同時に) 3 例
- ⑱ because・for (なぜならば、如何となれば) 0 例
- ⑲ not only~but~(also) (〜のみならず) 2 例
- ⑳ too-to~ (〜にはあまりに) 1 例
- ㉑ the more-the more (〜すればする程) 2 例

『坊っちゃん』割合一覧			
翻訳語法	例数	ページ数121(%)	全例数1402(%)
① have	4	3.31	0.29
② find	0	0	0
③ give	1	0.83	0.07
④ feel	0	0	0
⑤ seem・look	22	18.18	1.57
⑥ belong to	0	0	0
⑦ be obliged to	0	0	0
⑧ be used to	1	0.83	0.07
⑨ must	12	9.92	0.86
⑩ may	22	18.18	1.57
⑪ would・should・might	8	6.61	0.57
⑫ after	5	4.13	0.36
⑬ before	2	1.65	0.14
⑭ as soon as	6	4.96	0.43
⑮ as-as possible・as-as can	0	0	0
⑯ as-as・so-as	0	0	0
⑰ as the same time	3	2.48	0.21
⑱ because・for	0	0	0
⑲ not only~but~(also)	2	1.65	0.14
⑳ too-to	1	0.83	0.07
㉑ the more-the more	2	1.65	0.14
㉒ rather than	0	0	0
㉓ without	0	0	0
㉔ in spite of	1	0.83	0.07
㉕ instead of	4	3.31	0.29
㉖ if	8	6.61	0.57
㉗ in order to	3	2.48	0.21
㉘ though	0	0	0

『坊っちゃん』の28種類の翻訳語法の例数。

- ⑳ rather than (〜よりはむしろ) 0 例
 - ㉑ without (〜ことなしに) 0 例
 - ㉒ in spite of (〜にもかかわらず) 1 例
 - ㉓ instead of (〜ないかわりに) 4 例
 - ㉔ if (もしならば) 8 例
 - ㉕ in order to (〜するために) 3 例
 - ㉖ though (〜といえども) 0 例
- 計 107 例

二、翻訳語法の用例

- ① have (〜を持つている) 4例
- ・「古川の持つている田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もあつた。」 (p331)
- ② find (〜を見出す) 未見
- ③ give (〜を与える) 1例
- ・「教場のしくじりが生徒にどんな影響を与えて、その影響が校や教頭にどんな反応を呈するかまるで無頓着であつた。」 (p350)
- ④ feel (〜を感じる) 未見
- ⑤ seem・look (〜と見える) 22例
- ・「なあ俺の部屋まで来いと引つ立てると、弱虫と見えて、一も二もなく尾いて来た。」 (p362)
- ⑥ belong to (〜に属する) 未見
- ⑦ be obliged to (余儀なくされる) 未見
- ⑧ be used to (〜が常である) 1例
- ・「清がこんな事を云う度におれは御世辞は嫌だと答えるのが常であつた。」 (p333)
- ⑨ must (〜ねばならない・〜なければならぬ)
- ⑩ may (〜かもしれない) 22例
- ・「しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。」 (p337)
- ⑪ would・should・might (〜たであらう・〜たのだから) 8例
- ・「記事をごとちらに掲げたんだらうと論斷した。」 (p428)
- ⑫ after (後) 5例
- ・「教師も生徒も歸つてしまつたあとで、一人ぼかんとしてゐるのは随分間が抜けたものだ。」 (p355)
- ⑬ before (前) 2例
- ・「おれには心配なんか無い、先で免職をするなら、免職される前に辭表を出してしまふだけだ。」 (p428)
- ⑭ as soon as (〜や否や) 6例
- ・「最初は失敬、君の受持ちは…と人が起き上がるやいなや談判を開かれたので大いに狼狽した。」 (p346)
- ⑮ as-as・so-as (だけそれだけ) 未見
- ⑯ as the same time (〜と同時に) 3例
- ・「おれも同時に野だを散々に擲き据えた。」 (p437)
- ⑰ because・for (なぜなれば、如何となれば) 未見

⑲ not only~but (also) (〜のみならず) 2例

・「喧嘩の出てるのは驚ろかないのだが、中學の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意氣なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、兩人は現場にあつて生徒を指揮たる上、漫りに師範生に向つて暴行を擲にしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。」 (p426)

⑳ too-to (〜にはあまりに) 1例

・「坊っちゃんの手紙はあまり短すぎて、容子がよくわからないから、この次には責めてこの手紙の半分位の長さのを書いてくれ。」 (p392)

㉑ the more-the more (〜すればする程) 2例

・「船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。」 (p440)

㉒ rather than (〜よりはむしろ) 未見

㉓ without (〜ことなしに) 未見

㉔ in spite of (〜にもかかわらず) 1例
・「それにも関わらずあまりおやじを怖いとは思わなかつた。」 (p332)

㉕ instead of (〜ないかわりに)

・「おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をすがるが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。」

(p430)

㉖ 二 (もし〜ならば) 8例

・「もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治ればそれで済んだ。」 (p383)

㉗ in order to (〜するために) 1例

・「おれは食う爲めに玉子は買ったが、打つける爲めに袂へ入れてる譯ではない。」 (p437)

㉘ thought (〜といえども) 未見

まとめ

『三四郎』(『それから』『門』含む)では、二八種類の翻訳語法いづれも採録できる。翻訳語法における漱石の言文一致文が完成したと考えられるのが『三四郎』にあるためである。一方の『坊っちゃん』は、121ページに対し、用例数107と全体の割合は多い。しかし、採録された翻訳語法の種類は28種類中18種類であった。⑤⑨⑩の三種類は用例が多く、それはこの作品の特徴ともいえる主人公「おれ」の一人称からの視点の語りであるために推定・推測の助動詞が多く多用されたのだと考えられる。『吾輩は猫である』より、文章は短いため、用例数も少なかった。あるいは、会話文が多かったことも理由であろう。しかし、⑧(〜が常である)のように、『吾輩は猫である』では使われていなかった用例もあった

ため、翻訳語法は幅広く使われていた。

・⑤(〜と見える)は目に映ずるものを表す用法がい採録された。

「この手拭が湯に染つた上へ、赤い縞が流れ出したので一寸見ると虹色に見える。」(p353)

一方で、「〜と(のように)思われる」という意の用法も採録された。直訳で(見エル)と訳しながら、口語文に多く現れたと森岡氏は記している。

「自分の力でおれを製造しているように見える」(p333)

・⑨(くねばならない・くなければならぬ)は、漱石の処女作『吾輩は猫である』と同様に、当然の義務の用法を用いた例がほとんどであった。

「しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。」

(p337)

また、当然の推定は、(〜ネバナライ)を用いず、(〜二相違ナイ・〜二違イナイ)を用いていた。これも『吾輩は猫である』と同じく、当然の義務と当然の推定を区別しているようだ。(〜二違イナイ)8例・(〜二相違ナイ)9例の計17例が採録された。

・⑩(くたであろう・くたのだろう)は8例採録された。

「實を云ふと賞めたんぢやあるまい、ひやかしたんだろう。」

・⑫(〜と同時に)は、「二つの出来事が同時に起こる」用法が明

治以降に増えたと森岡氏が考察するように、と作品もその用法が使われていた。

「こう考えて、いやいや、附いてくると、何だか先鋒が急にがやがや騒ぎました。同時に列はびたりと留まる。」(p418)

・⑳(〜といえども)は『坊っちゃん』では採録されなかった。そして第一章と同様に(〜ケレドモ)の抽出を行った。その結果、12例採録された。

「おやじは頑固だけれども、そんな依怙^{えこひ}鼻^{いびき}眞^{まこと}はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。」

「蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかつた。」「言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測ってみると、何でもおれのことについて内所話をしているに相違ない。」

『坊っちゃん』自体、主人公「おれ」のナレーションで話が進行していくため、語り口調つまりは口語の要素が強い作品である。

(〜けれども)の用例いづれも語り口調で書かれていたため、翻訳語法として観会えるのは難しいと考えられる。しかし、この作品が口語で構成されていることに関しては、言文一致体の要素を多く含んだものである。

三、『三四郎』の翻訳語法

一、翻訳語法一覧

【参考文献】『夏目漱石集Ⅲ』（日本近代文学大系第26巻、角川書店、一九七二）

① have (〜を持っている)	10 例
② find (〜を見出す)	3 例
③ give (〜を与える)	11 例
④ feel (〜を感じる)	29 例
⑤ seem・look (〜と見える)	65 例
⑥ belong to (〜に属する)	0 例
⑦ be obliged to (余儀なくされる)	0 例
⑧ be used to (〜が常である)	0 例
⑨ must (〜ねばならない・〜なければならぬ)	17 例
⑩ may (〜かもしれない)	23 例
⑪ would・should・might (〜たであろう・〜たのだろう)	1 例
⑫ after (後)	7 例
⑬ before (前)	3 例
⑭ as soon as (〜や否や)	11 例
⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ)	6 例

⑯ as-as・so-as (だけそれだけ)	3 例
⑰ as the same time (〜と同時に)	11 例
⑱ because・for (なぜなれば、如何となれば)	1 例
⑲ not only~but~(also) (〜のみならず)	8 例
⑳ too~to (〜にはあまりに)	9 例
㉑ the more~the more (〜すればする程)	3 例
㉒ rather than (〜よりはむしろ)	17 例
㉓ without (〜ことなしに)	0 例
㉔ in spite of (〜にもかかわらず)	6 例
㉕ instead of (〜ないかわりに)	8 例
㉖ if (もし〜ならば)	13 例
㉗ in order to (〜するために)	14 例
㉘ though (〜といえども)	0 例

以上の結果から、『三四郎』の28種類の翻訳語法の例数。

計257例

『三四郎』割合一覽表			
翻訳語法	例数	ペーシ数249(%)	全例数1402(%)
①have	10	4.62	0.71
②find	3	1.2	0.21
③give	11	4.42	0.78
④feel	29	11.2	2.07
⑤seem・look	65	26.1	4.64
⑥belong to	0	0	0
⑦be obliged to	0	0	0
⑧be used to	0	0	0
⑨must	17	6.83	1.21
⑩may	23	9.24	1.64
⑪would・should・might	1	0.4	0.07
⑫after	7	2.81	0.5
⑬before	3	1.2	0.21
⑭as soon as	11	4.42	0.78
⑮as possible・as as can	6	2.41	0.43
⑯as as・so as	3	1.2	0.21
⑰as the same time	11	4.42	0.78
⑱because・for	1	0.4	0.07
⑲not only・but (also)	8	3.21	0.57
⑳too・to	9	3.61	0.64
㉑the more・the more	3	1.2	0.21
㉒rather than	17	6.83	1.21
㉓without	0	0	0
㉔in spite of	6	2.41	0.43
㉕instead of	8	3.21	0.57
㉖if	13	5.22	0.93
㉗in order to	14	5.62	1
㉘though	0	0	0

二、翻訳語法の用例 ① have (ゝを持つている) 10例

・「其手を吾妻コートから出した時、白い半帛を持つてゐた。」

② find (ゝを見出す) 3例 (p 291)

・「其調子には初對面の女には見出す事の出来ない、安らかな音色があつた。」 (p 94)

③ give (ゝを与える) 11例

・「ことに美禰子が團扇を翳してゐる構圖は非常な感動を三四郎に與へた。」 (p 193)

④ feel (ゝを感じる)

・「大きな未來を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。」 (p 55)

⑤ seem・look (ゝと見える) 5例

・「隣の連中には餘程世間が廣い男達と見えて、右左を顧みて、彼所には誰がある。」 (p 279)

⑥ belong to (ゝに属する) 0例

⑦ be obliged to (余儀なくされる) 0例

⑧ be used to…… (ゝが常である) 0例

⑨ must (ゝねばならない・ゝなければならぬ) 17例

・「野々宮の様な外國に迄聞える程の仕事をする人が、普通の學生同様な下宿に這入つてゐるのも必竟野々宮が偉いからの事で、下宿が汚なければ汚い程尊敬しなければならない。」 (p 182)

⑩ may (ゝかもしれない) 23例 (p 182)

・「實際與次郎は金錢の上に於ては、信用し悪い男かも知れない。」 (p 204)

⑪ would・should・might (ゝたであろう・ゝたのだろう) 1例

・「口を利かない所が床しく思はれたのだらう。」 (p 275)

⑫ after (後) 7例 (p 275)

・「田舎者の三四郎にはてつきり其処と氣取る事は出来なかつたが、

ただ讀んだあとで、自分の心を探つて見て何處かに不満足がある様に見えた。

⑬ before (前) 3例

・「此婦人は三四郎の身體がまだ扉の影を出ない前から席を立つて待つてゐたものと見える。」 (p 95)

⑭ as soon as (〜や否や) 11例

・「三四郎が覗くや否や隣の男はノートを三四郎の方に出して見せた。」 (p 75)

⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 6例

・「爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。」 (p 46)

⑯ as-as・so-as (ただそれだけ) 1例

・「生活難の事、紛擾の事、一つ所に長く留まつていられぬ事、学科以外に柔術の教師をした事、ある教師は、下駄の台を賣つて、鼻緒は古いのを、着げ更えて、用いられる丈用いる位にしている事、今度辭職した以上は、容易に口が見付かりそうもない事、已を得ず、それまで妻を国元へ預けた事―中々付きそうもない。」

⑰ as the same time (〜と同時に) 11例

・「たゞ腹の中で、これしきの女の云ふ事を、明瞭に批評し得ないのは、男兒として腑甲斐ない事だと、いたく赤面した。同時に、

東京の女學生は決して馬鹿に出来ないものだ」と云ふ事を悟つた。」

(p 140)

⑱ because・for (なぜなれば、如何となれば) 1例

・「なぜといふと、現代人は事實を好むが、事實に伴ふ情操は切り棄る習慣である。」 (p 241)

⑲ not only~but (also) (〜のみならず) 8例

・「實際學問の威嚴に打たれたに違ない。そのみならず先生が號鐘が鳴つて十五分立つても出て來ないので益豫期から生ずる敬畏の念を増した。」 (p 74)

⑳ too~o (〜にはあまりに) 9例

・「日本歴史を習つたのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿の事もつい忘れて仕舞つた。」 (p 278)

㉑ the more~the more (〜すればする程) 3例

・「自分研究すればする程、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に對して不親切になる。」 (p 139)

㉒ rather than (〜よりはむしろ) 17例

・「眼と口に笑を帯びて無言の儘三四郎を見守つた姿に、男は寧ろ甘い苦しみを感じた。」 (p 207)

㉓ without (〜ことなしに) 0例

②④ in spite of (〜にもかかわらず) 6例

・「それにも拘はらず、圓満の發達を冀ふべき筈の此世界が却つて自らを束縛して、自分が自由に出入すべき通路を塞いでゐる。」

(p114)

②5 instead of (～ないかわりに・～のかわりに) 8例

・「其代り枝が半分往來へ逃げ出して、もう少しすると電話の妨害になる。」

(p116)

②6 if (もし～ならば) 13例

・「要するに自分^もし現実世界と接觸してゐるならば、今の所母より外にないのだらう。」

(p62)

②7 in order to (～するために) 14例

・「只三四郎を安心させる爲に電報だけ掛けた。」

(p385)

②8 though (～といえども) 0例

まひめ

『三四郎』では④(～と感ずる) ⑤(～と見える) がより多く抽出された。また、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』では見られなかった⑩(なぜなれば。如何となれば)の用例が見つかった。

・①(～を持ってゐる)は①「have+名詞(もの)」という所有の意味だけでなく、②「have+抽象名詞」の用法が翻訳で使用されるようになったと森岡氏は記している。ここでは①の用法

が多く採録された。

「是は團扇も何も持つて居ない。」

(p67)

また、②の抽象名詞の用法も10例中3例採録された。ここでは、

「感情・考え」の抽象名詞が用いられた。

「みんな廣田先生に同情を持つてゐる連中だから、談判の模様によつては、こつち此方から先生の名を當局者へ持ち出すかも知れない」

(p202)

・④(～を感ずる)は、作品ごとの「ページ数に対する用例数の割合」が11.2%と、当作品では二番に多く採録された。初期作品『吾輩は猫である』は2.93%であり、『坊っちゃん』は0%である。中期作品である『三四郎』からより口語文が馴染んできたのだろうか。

ここでは採録されたほとんどが他動詞であった。他動詞の feel には、対象となる感覚や感情がつく。

・精神的知覚

「三四郎は九州から山陽線に移つて、段々教大阪へ近付いくうちに、女の色が次第に白くなるの何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じてゐた。」(p46)

・肉体的知覚

「三四郎は其呼吸を感ずる事が出来た。」(p154)

「しかも、悲しいはずの所を、快く眺めて、美しく感じたのである。」(p243)

このように、(感じる) という語法はあらゆる物事に對し用いられたものであり、用例の「憐れ」「此矛盾」等の抽象名詞なども使われていた。

・⑤(く見える) は65例と一番頻出した語法である。

「目に映ずる」用法よりも「くと思われる」用法が見られた。

・目に映ずる用法

「しかも人がたくさんいる。そうして向こうのはずれにいる人の頭が黒く見える。」(p80)

・くと思われる用法

「其寐てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。」(p47)

・⑨(くねばならない・くなければならぬ) は初期作品ほどではないが、用例数は多かった。ここでも当然の義務を意とした用法がほとんどであった。しかし、当然の推定(く二違イナイ・相違ナイ)の意で用いられる可能性がある用例も採録された。

・「當人には悲劇に近い出來事、くくく知れないが、くまい。」

右の例は、波線部分の「くも知れない」「くまい(助動詞)」の推定の要素を表す品詞が文中に記されている。このことから(判

別は難しいが)この用例の(くなければならぬ)も当然の推定の意であると考えられる。

ここでも、当然の推定(く二相違ナイ・く二違イナイ)の抽出を行う。

・「く二相違ナイ」1例

「なにしろよほどよく広田さんを知つてゐる男に相違ないということには三人とも同意した。」

・「く二違イナイ」21例

「三四郎は欲も得もいらぬほどこわかった。ただごとく瞬間である。そのまゝまではたしかに生きていたに違いない。」

この結果、『三四郎』でも当然の義務・当然の推定を区別して用いていることが分かった。森岡氏で記されていた、長塚節の作品『土』において区別されずに使用されていた語法は、例外に近いと考えられる。

・⑩(くかも知れない) は三番目に多く採録された。

「たとひ金が自由になるとしても、兄の許諾を得ない内證の金を借りたとなると、借りる自分は兎に角、あとで、貸した人の迷惑になるかも知れない。」(p203)

・⑪(なぜなれば・如何となれば) は四作品の中で1例のみ採録された。

「なぜといふと、現代人は事實を好むが、事實に伴ふ情操は切り棄る習慣である。」(p241)

・⑱(くのみならず)は『吾輩は猫である』と比べて用例数は減った。そして、『吾輩は猫である』でみられた、文頭に「加之(しかのみならず)」の表記はなかった。漢文訓読の色が薄まり、より現代に馴染みやすい表記に変化したと考えられる。

・⑳(くといえども)は中期作品『三四郎』からは全く採録されず、一方で(くけれども)は87例採録された。

・「不實な性質ではないから、大丈夫だけれども、何時までも遊んで食べている譯には行かないので、安否のわかるまでは仕方ないから、里へ歸つて持つている積りだ。」(p47)

『坊っちゃん』では用例数が少なく判断しにくかったが、当作品から採録された(くけれども)の用例数から、(くといえども)はほとんど使用されることはなくなったのではないだろうか。

『三四郎』は他作品と同様に⑤(くと見える)⑨(くねばならない・なければならぬ)⑩(くかも知れない)の用例が頻出した。一方で、④(くと感じずる)や⑳(くより寧ろ)のように初期作品より追う例数が上がった語法もある。森岡氏によると翻訳語法は口語文が多用されてくるにつれて、使われやすい傾向があるようだ。そのため、中期作品『三四郎』はその傾向が

顕著に現れているように考えられる。

また、㉔(くといえども)はその逆である。用例数が減少しているが、代りに(くけれども)が初期作品より増加傾向にあることから、翻訳語法の直訳が現代語らしく変化していると推測できる用例もあった。夏目漱石自身、『三四郎』を掲載した一九〇八(明治四一)年より以前の一九〇七(明治四〇)年に朝日新聞社に入社している。教師と作家をしていた「兼業時代」から「職業作家」としてひとつの道を歩み始めた頃でもある。『三四郎』は朝日新聞で掲載された作品である。そのためだろうか、大衆に向けて載せることを意識したことで口語文(翻訳語法)をより多く使用するようになったのではないか。

四、『く』の翻訳語法

一、抽出結果

【依拠文献】『夏目漱石集Ⅳ』(日本近代文学大系第27巻、角川書店、一九五四)

① have (くを持つている)	43 例
② find (くを見出す)	4 例
③ give (くを与える)	28 例
④ feel (くを感じる)	39 例

- ⑤ seem・look (〜と見える) 55例
- ⑥ belong to (〜に属する) 1例
- ⑦ be obliged to (余儀なくされる) 1例
- ⑧ be used to (〜が常である) 1例
- ⑨ must (〜ねばならない・〜なければならぬ) 59例
- ⑩ may (〜かもしれない) 40例
- ⑪ would・should・might (〜たであろう・〜たのだろう) 11例
- ⑫ after (後) 29例
- ⑬ before (前) 14例
- ⑭ as soon as (〜や否や) 11例
- ⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 13例
- ⑯ as-as・so-as (だけそれだけ) 0例
- ⑰ as the same time (〜と同時に) 13例
- ⑱ because・for (なぜならば、如何となれば) 0例
- ⑲ not only~but (also) (〜のみならず) 13例
- ⑳ too-to (〜にはあまりに) 4例
- ㉑ the more-the more (〜すればする程) 4例
- ㉒ rather than (〜よりはむしろ) 37例
- ㉓ without (〜ことなしに) 0例
- ㉔ in spite of (〜にもかかわらず) 4例

[いろいろ]割合一覧表			
翻訳語法	例数	パーセント237(%)	全例数1402(%)
①have	43	18.14	3.07
②find	4	1.69	0.29
③give	28	11.8	2
④feel	39	16.46	2.76
⑤seem・look	55	23.21	3.92
⑥belong to	1	0.42	0.07
⑦be obliged to	1	0.42	0.07
⑧be used to	1	0.42	0.07
⑨must	59	24.89	4.21
⑩may	40	16.88	2.85
⑪would・should・might	11	4.64	0.78
⑫after	29	12.23	2.07
⑬before	14	5.91	1
⑭as soon as	11	4.64	0.78
⑮as-as possible・as-as can	11	4.64	0.78
⑯as-as・so-as	2	0.84	0.14
⑰as the same time	13	5.49	0.93
⑱because・for	0	0	0
⑲not only~but (also)	13	5.49	0.93
⑳too-to	4	1.69	0.29
㉑the more the more	4	1.69	0.29
㉒rather than	37	15.61	2.64
㉓without	0	0	0
㉔in spite of	4	1.69	0.29
㉕instead of	14	5.91	1
㉖if	24	10.13	1.71
㉗in order to	8	3.38	0.57
㉘though	0	0	0

- ㉙ instead of (〜ないかわりに) 14例
 - ㉚ if (もし〜ならば) 24例
 - ㉛ in order to (〜するために) 8例
 - ㉜ though (〜といえども) 0例
- 計 470例

以上の結果から、『こころ』の28種類の翻訳語法の例数。

二、翻訳語法の用例

- ① have (〜を持っている) 43例
- ・若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた。(p49)

② find (〜を見出す) 4例

・「私は其場合此四角な帽子に一種の自信を見出した位です。」

(p183)

③ give (〜を与える) 28例

・「傷ましい先生は、自分に近つかうとする人間に、近づく程の價値のないものだから止せといふ警告を與へたのである。」

(p50)

④ feel (〜を感じる) 39例

・「私は往來で學生の顔を見るたびに新しい學年に對する希望と緊張とを感じた。」

(p51)

⑤ seem・look (〜と見える) 55例

・「さういふ有様を目撃した許りの私の眼には、猿股一つで濟まして皆なの前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。」

(p46)

⑥ belong to (〜に属する) 1例

・「是は彼の父の感化なのか、又は自分の生れた家、即ち寺といふ一種特別な建物に属する空氣の影響なのか、解りません。」

(p201)

⑦ be obliged to (余儀なくされる) 1例

・「斯ういふ氣樂な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭

の事情に餘儀なくされて、既に妻を迎へてゐたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に氣が付きませんでした。」

(p173)

⑧ be used to (〜が常である) 1例

・「御嬢さんの學校友達がときたま遊びに來る事はありましたが、極めて小さな聲で、居るのだから居ないのだから分らないやうな話をして歸つてしまふのが常でした。」

(p194)

⑨ must (〜ねばならない・〜なければならぬ) 59例

・「私は今迄幾度か手を着けようとしては手を引つ込めた卒業論文を愈本式いよくに書き始めなければならぬと思ひ出した。」

(p95)

・「其年のればならない參い事が間々あつたと云はなけ

⑩ may (〜かもしれない) 40例

・「特別に事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。」

(p46)

⑪ would・should・might (〜たであらう・〜たのだらう) 11例

・「考へると是は私がまだ世間に出ない爲でもあり、又實際其場に臨まない爲でもあつたらうが、兎に角若い私には何故か金の問物質的に私に取つて有利なものでしたらうか。」

(p180)

⑫ after (後) 29例

・「彼等の出て行つた後、私は矢張元の床几しょうぎに腰を卸して烟草を吹かしてゐた。」 (p 47)

⑬ before (前) 14例

・「三日うちに歸國する筈になつてゐたので、座を立つ前に私は一寸暇乞の言葉を述べた。」 (p 115)

⑭ as soon as (くや否や) 11例

・「適當な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢ひを得て倒れやうとした。」 (p 125)

⑮ as-as possible・as-as can (出来るだけ) 13例

・「故意が自然か、私はそれを出来る丈切り詰めた生活をしてゐたのだけ。」 (p 165)

⑯ as-as・so-as………… (だけそれだけ) 0例

⑰ as the same time… (くと同時に) 13例

・「けれども事實を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。」 (p 115)

⑱ because・for (なぜなれば、如何となれば) 0例

⑲ not only~but (also) (くのみならず・許りでなく) 13例

・「のみならず數ある同級生のうちで、經濟の點にかけては、決して人を羨ましがらる憐れな境遇にゐた譯ではないのです。」 (p 170)

⑳ too~? (くにはあまりに) 4例

・「小勢な人数に廣過ぎる古い家はひっそりしてゐる中に、私は行李を解いて書物を繕き始めた。」 (p 130)

㉑ the more-the more (くすればする程) 4例

・「二度平氣で其所を通り抜けたら、馴れ、ば馴れる程、親しみが増す丈で、戀の神經はだん、癡痺して來る丈です。」 (p 175)

㉒ rather than (くよりはむしろ) 37例

・「其時の私は屈托がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。」 (p 47)

㉓ without (くことなしに) 0例

㉔ in spite of (くにもかかわらず) 4例

・「だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも關らず、私は寧ろ平氣でした。」 (p 176)

㉕ instead of (くないかわりに) 14例

自分の前に現はれた女のために引き付けられる代りに、其場に臨んで却つて變な反撥力を感じた。」 (p 80)

㉖ if (もしくならば) 24例

・「待ち合はせるために振り向いて立ち留まつた私の顔を見て、先生は斯う云つた。」 (p 106)

㉗ though………… (くといえども) 0例

まとめ

『いゝろ』は一九一四年(大正三)年の作品であり、夏目漱石が逝去する二年前に出された。用例数の割合から、初期・中期の作品と同じく⑤(〜と見える)等の動詞、⑨(〜ねばならない・くなければならぬ)の助動詞がとりわけ多く採録された。

・⑨(〜ねばならない・くなければならぬ)は、先行研究で挙げた森岡健二によると、当然の義務(〜ネバナラヌ)と当然の推定(〜二相違ナイ・く違イナイ)という意味が含まれる。当作品ではほとんどが当然の義務で使用されたと思われる。

「國へ歸へつてからの日程といふやうなものを豫め作つて置いたので、それを履行するに必要な書物も手に入らなければならなかつた。」

一方で、当然の推定(〜二相違ナイ)の意味と判断できるものはなく、(〜二相違ナイ)とそのまま使われている文がいくつか確認された。

・⑪(〜たであろう・くたのだらう)の用法は、⑳(もしくならば)と共に使用されることが多く、11例中3例採録された。「もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働き掛けたら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつ

りと切れて仕舞つたらう。」

これは英文法(もしくなら・たであろう)の仮定法の形式であり、より翻訳的語法である。

・⑱(〜のみならず)は漢文でも使われている語法である。『こゝろ』では13例中1例しか採録されなかつた。

「のみならず数ある同級生のうちで、經濟の點にかけては、決して人を羨ましがらぬ憐れな境遇にゐた譯ではないのです。」

残りの用例はすべて、(ばかりでなく)という語で採録された。

・「何も知らない私は、叔父を信じてゐた許りでなく、常に感謝の心をもつて、叔父をありがたひものゝやうに尊敬してゐました。

このように、翻訳語法の取り上げた28種であつたが、⑱(〜のみならず)のように、漢文訓読語法から(〜ばかりでなく)の現代語の使用に移行しつゝあつたことが分かつた。

おわりに

漱石の初期作品において、翻訳語法の全使用例の抽出を行った。二作品共、⑤(〜と見える)⑨(〜ねばならない、くなければならぬ)⑩(〜かもしれない)の使用数が非常に多く見られた。

いずれの作品も、一人の語り手の視点から描かれたものであるが、理由であろう。そして、言文一致運動の確立期に書かれたこの二作品は、28種類の翻訳語法によって用例数などの差はあったが、英語の直訳を用いていたことから漱石自身の翻訳意識が強かったと考えられる。『三四郎』（明治四一年）についても初期の二作品と似たような抽出結果となった。一方で、当作品でのみ⑩（なぜならば、如何となれば）の用例が採録された。

対象作品すべてにおいて、⑤（〜と見える）⑨（〜ねばならない、〜なければならぬ）の用法が、多く使用されていた。また、田島優氏の著書によると、「⑩（〜と雖も）は漢文訓読語法によるものである」と書かれている。初期作品の『吾輩は猫である』『坊っちゃん』では、それぞれにおいて用例が採録された。しかし、中期作品『三四郎』と後期作品『こゝろ』になると、用例は採録されなかった。同時に、（〜と雖も）にかわり（〜けれども）の用例が採録されたことから、より現代に近い語法に変化していることが分かる。夏目漱石は、初期作品と、中期・後期作品の間の一九〇七（明治四〇）年の四月に朝日新聞社に入社している。入社以降の漱石の作品は、すべて朝日新聞に掲載されている。彼が大学講師から、本格的に職業作家として執筆することになったことでより大衆に読まれやすい現代小説を目指すようになった。

注

注1 山本正秀『言文一致の歴史論考』（桜楓社、一九七一年）

注2 森岡健二『欧文訓読の研究―欧文脈の形成―』（明治書院、一九九九年）

注3 田島優著『漱石と近代日本語』（翰林書房、二〇〇九年）

注4 『ジーニアス英和辞典』（小西友七 南出康世編集主幹）第三版、大修館書店、二〇〇一年）

